

千葉県野田市におけるコウノトリ放鳥前段階の住民意識について

*高橋正弘¹・本田裕子¹

Local people's consciousness just before releasing of Oriental White Storks at Noda city, Chiba, Japan

*Masahiro Takahashi¹ and Yuko Honda¹

¹ Department of Human Life and Environment Studies, Faculty of Human Studies, Taisho University, 3-20-1 Nishi-sugamo, Toshima-ku, Tokyo 170-8470, Japan

* E-mail: m_takahashi@mail.tais.ac.jp

Abstract This research aims to conduct a questioner survey for local people at Noda city in Chiba Prefecture, Japan, and to analysis their recognition, concerns and hopes of them toward Oriental White Stork and its reintroduction project at just before the three chicks release in the city. Survey had been conducted in June to July 2015, and approximately thirty percent of people have answered the questioner.

As a result of questioner, sixty-five percent of local people have showed positive opinion for reintroduction of Stork and implementing a reintroduction project at Noda city. Around thirty percent of people have considered that the Stork means symbol and barometer of rich environment, and thirty percent of people have thought Stork is a environmentally rare and valuable bird. Regarding to environmental education dealing with Stork and its reintroduction, people have showed expected targets of environmental education activities should be whole local people and children as well in the city. Sixty percent people have thought that environmental education and public awareness activities are important for Stork conservation, but around thirty-five percent people haven't recognized its necessity.

Key words Environmental education, Noda city, Oriental White Stork, Reintroduction, Questioner survey

背景・目的

2015年のIUCNレッドリストによると、世界における絶滅危惧種は22,784種であり、これらの保護には生息数を減少させている原因（例えば、生息地の破壊や乱獲、外来種の移入など）を取り除くのが望ましい。しかし減少が著しく、原因を取り除くだけでは絶滅を防げないと予想される場合、対象種を飼育下において保護することが緊急手段として存在する。飼育下におく保護には、数を増やすという「増殖」を経て、野生に帰す「再導入」が最終目標として存在する。再導入は、希少性の高い絶滅危惧種を対象にした野生生物保護の手段といえ、文化財保護あるいは保全生態学の観点から一定の意義があるとされる（内藤ほか 2011）。再導入は対象種を放すだけではなく、その定着を図ることも当然含まれる。それには、対象地域の住民の理解と協力が欠かせず、さまざまな施策が求められる。野生復帰事業とはそれらの施策を含めた総合的な政策といえる。

野生復帰事業には、対象地域でのさまざまな保全活動を引き出すことにより、地域活性化を実現させるという社会的な意義も認められる。日本で最初に再導入が実施された兵庫県豊岡市では、「コウノトリとの共生」をキーワードに、知名度の上昇、観光客の増加、農産物のブランド化に成功し、「環境と経済の両立」の代表的事例として全国的に注目されている。例えば、豊岡市内の観光施設や観光地に影響を与えたと想定して、年間約10億円の経済効果を豊岡市に与えたと試算している（大沼・山本 2009）。

このように野生復帰事業は対象地域にも大きな影響を与えるものであり、また対象種は住民の生活空間の中に放されるため、地域住民の理解と協力を得るためにも住民意識を把握することは重要である。事実、野生復帰事業において、対象地域の住民から同意を得ること、住民がどのような影響を受けるのか把握することの必要性は、IUCNが1995年に作成したに関するガイドラインで指摘されている（IUCN 1995）。

日本における野生復帰事業をめぐり、これまで兵庫県豊岡市、新潟県佐渡市、長崎県対馬市において、コウノ

¹ 大正大学人間学部人間環境学科
170-8470 東京都豊島区西巣鴨3-20-1
*E-mail: m_takahashi@mail.tais.ac.jp

トリやトキ、ツシマヤマネコに関する住民意識を、聴取調査やアンケート調査を通じて把握する試みが行われてきている。特にアンケート調査については、コウノトリの事例では2006年1月と2011年1月に、トキの事例では2008年8月、2009年1月、2014年11月に、ツシマヤマネコをめぐるのは2009年1月と2015年1月に実施している(本田 2006, 2009, 2015; 本田・林 2009; 本田ほか 2010, 本田・菊地 2011, 本田・高橋 2015)。

上述の野生復帰事業の対象種の中で、コウノトリに着目した場合、コウノトリの野生復帰計画そのものが近年国内で広がりを見せており、例えば2010年には千葉県、茨城県、埼玉県、栃木県の29市町村でつくる「コウノトリ・トキの舞う関東自治体フォーラム」が設立されている。このフォーラムに参加する千葉県野田市は、2012年12月よりコウノトリの飼育を開始し、2013年、2014年、2015年と3年連続で繁殖を成功させている。野田市のコウノトリ飼育施設である「こうのとり」が設置されている江川地区は、1990年代につくばエクスプレス計画に伴って宅地化計画が出たが、その後のバブル経済の崩壊により開発業者が撤退し、土地が荒れることを危惧した野田市によって2006年に土地が購入され、里山環境の保全・管理・活用を目指した取り組みが進められている。野田市は「野田自然共生ファーム」を設立し、この江川地区における復田作業や生き物調査、市民農園の他、江川地区の里山環境のシンボルとしてのコウノトリの飼育を内容とした事業を展開している(Anonymous 2011)。そして、2015年7月23日にコウノトリの放鳥式典が開催され、飼育場からソフトリリースという方法で、2015年3月に産まれた3羽のコウノトリが野外に放鳥され、東日本で初めてとなるコウノトリの放鳥が実施された。福井県越前市でも同様の事業が実施されている。

コウノトリの野生復帰は、今後日本各地で実施されていくことが予想される。しかし、野生生物との距離が近く、人間の生活空間で野生復帰が実施されることが多い日本においては、実施される地域の住民と野生復帰される生物がどのような関係を営んでいくのか、そのためには地域住民が野生復帰および野生復帰される生物をどのように認識しているかを把握することは、野生復帰事業の成否に関わり重要である。

野田市をはじめ千葉県内でコウノトリの生息が確認されたのは、新保(2013)によると1884(明治17)年頃とされる。また野田市には「鴻ノ巣」という字があり、かつてコウノトリが生息していたことを伺わせるが、コ

ウノトリと住民との関わりについては少なくとも100年以上の空白期間があり、住民の意識の中には野生生物としてのコウノトリはほとんど根づいていないと予想される。このことは豊岡市が1971年に野生下絶滅するまでの生息地であったことと対称的である。そのような中でこの野田市でコウノトリを放鳥させることが、住民にとってどのような意味を持つのか、住民はどのようにコウノトリおよびコウノトリの野生復帰事業を意識しているのかを把握することは、今後、各地で野生復帰が検討・計画されていくことを考えれば意義深いと考えられる。

野田市は全国有数の枝豆の生産量であり、水田も多く、農業が盛んな自治体であるが、それと同時に都心に30kmと首都圏に通勤する人々のベッドタウンとなっており、宅地面積も多い。このことから、これまでコウノトリの放鳥が実施されてきた豊岡市とは、自然環境および社会環境が大きく異なっている。したがって野田市の住民には都市化が進む首都圏郊外の住民としての意識、いわゆる都市型住民であるといった意識が色濃く反映されていることが推察される。以上のことから、野田市で実施される野生復帰は、都市型野生復帰として位置づけることができるだろう。

そこで本研究は、この千葉県野田市において、放鳥が実際に行われる直前の段階で、野田市の住民がコウノトリおよびコウノトリの野生復帰をどのように捉えていたのかを明らかにするために、アンケート調査を行い、その結果を分析することを目的とする。

方 法

野田市の人口は155,389人となる(2015年9月1日時点での住民基本台帳による人口)。アンケート調査は、2015年6月25日に郵送により実施した。野田市選挙人名簿より無作為に抽出した20歳から79歳の男女500人を対象とした。回収数は147通であった(回収締切日は2015年7月18日を設定した。500通発送したうち、宛先不明での返送が4通あり、496通内147通で計算した結果、回収率は29.6%となる)。アンケート票は全22問、枝問を含めると全63問となる。質問内容は表1の通りである。

結 果

1. 回答者の属性

「回答者の特徴(年代・性別・居住地・定住意思・職

表1. アンケート票の構成.

質問番号	質問内容
1	回答者の年代・性別
2	回答者の居住地・野田市内の居住年数
3	地域（千葉県・野田市・地区）への定住意思の程度
4	回答者の職業
5	「野田を象徴するもの」のイメージ
6	「野田の自然」のイメージ
7	環境問題への関心の有無・関心分野
8	野田市の環境課題
9	野田市の環境政策
10	コウノトリのイメージ
11	コウノトリ及び保護への認識
12	野生復帰の賛否について
13	野生復帰についての心配の有無
14	野生復帰についての期待の有無
15	放鳥されたコウノトリの野田での生息希望
16	野生復帰成功のために何かを行おうという意思
17	コウノトリ保護のための環境教育や啓発活動について
18	農業被害について
19	放鳥されたコウノトリの死亡について
20	放鳥されたコウノトリの責任主体について
21	回答者自身のコウノトリの位置づけ
22	野田市の課題

表2. 回答者の年代・性別.

年齢層	男	女	合計
20歳代	1 (0.7)	6 (4.1)	7 (4.8)
30歳代	9 (6.2)	8 (5.5)	17 (11.7)
40歳代	16 (11.0)	11 (7.6)	27 (18.6)
50歳代	11 (7.6)	18 (12.4)	29 (20.0)
60歳代	21 (14.5)	14 (9.7)	35 (24.1)
70歳代	19 (13.1)	11 (7.6)	30 (20.7)
全体	77 (53.1)	68 (46.9)	145 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

業・環境問題への関心・環境政策の認知)」をふまえ、回答者が母集団である野田市全域住民をどのように代表しているのかを述べる。なおこれ以降、アンケート結果は質問毎で回答者数が異なっているのは、質問によって回答がなかったものがあったからである。

1-1) 回答者の特徴

回答者の平均年齢は55歳であった。回答者の年代・性別（表2）は年代では、60歳代が最も多く、次に70歳代、50歳代が続いている。性別は、男性53.1%、女性46.9%とほぼ半数ずつであるが男性が多かった。

居住地については、4人以上の回答があった地名を整理した（表3）。山崎が15人と最も多く、岩名や木間ヶ瀬、野田が続いた。

野田市内での居住年数では、「20年以上」のみで約半

数、「生まれてからずっと」と合計すると7割以上に達した（表4）。居住地への定住意思について、「あなたは以下の地域内に特別な事情が発生しない限り、今後も住み続けようと思っていますか」という質問をした。「おおいに思っている」の割合が最も大きかったのは、地区、野田市、千葉県となった（表5）。それぞれの回答者数が異なるが、地域への定住意思は、地域への愛着を示すといえ、野田市への愛着を半数近くが持っていることが伺える。

職業は、特に兼業で農業従事している回答者がいること等を想定し、複数回答とした（表6）。その結果、「勤め人」が最も多く、次いで「無職」「家事専業」となった。「農業」は2人（1.4%）と少数となった。年金生活者が想定される「無職」が多くなったことの背景には、そもそも回答者の年齢が高いことが考えられる。

環境問題への関心の有無については、87.6%の回答者が環境問題に関心があると答えていた（回答者数145人）。なお、内閣府の世論調査（内閣府 2014）では、自然への関心は約9割あり、ほぼ同程度の関心の高さといえる。関心のある分野としては、「地球温暖化・オゾン層破壊」が約4割と最も多く選ばれ、「自然環境」が続

表3. 回答者の居住地（上位10地区）.

居住地名	人数
山崎	15 (10.5)
岩名	9 (6.3)
木間ヶ瀬	8 (5.6)
野田	8 (5.6)
七光台	7 (4.9)
尾崎	6 (4.2)
光葉町	5 (3.5)
中根	5 (3.5)
柳沢	5 (3.5)
古布内	4 (2.8)
回答者数	143 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

表4. 野田市内での居住年数.

選択肢	人数
生まれてからずっと	40 (27.6)
3年未満	2 (1.4)
3年以上5年未満	0 (0.0)
5年以上10年未満	11 (7.6)
10年以上20年未満	21 (14.5)
20年以上	71 (49.0)
回答者数	145 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

表5. 県内, 市内および地区内への定住意思.

選択肢	千葉県内	野田市内	地区内
おおいに思っている	44.6	52.2	52.9
少し思っている	22.8	15.0	17.4
どちらともいえない	23.9	19.5	14.9
あまり思っていない	7.6	8.8	8.3
ほとんど思っていない	1.1	4.4	6.6
回答者数	92	113	121

数値は各カテゴリ内における割合 (パーセント) を示す.

表6. 回答者の職業 (複数回答を含む).

選択肢	人数
勤め人	54 (37.0)
無職	26 (17.8)
アルバイト・パートタイム	22 (15.1)
家事専業	22 (15.1)
自営業	10 (6.8)
公務員・団体職員・教員	8 (5.5)
農業	2 (1.4)
学生	1 (0.7)
林業・水産業	0 (0.0)
その他	2 (1.4)
回答者数	146 -

括弧内は割合 (パーセント) を示す.

表7. 関心のある環境問題の分野.

選択肢	人数
地球温暖化・オゾン層破壊	49 (38.6)
自然環境	34 (26.8)
ごみ・リサイクル	19 (15.0)
放射性物質	13 (10.2)
大気汚染	8 (6.3)
自然エネルギー・省エネ	4 (3.1)
化学物質	0 (0.0)
その他	0 (0.0)
回答者数	127 (100.0)

括弧内は割合 (パーセント) を示す.

表8. 野田市の環境政策等に関する認識.

質問	はい	いいえ	存在を知らない	回答者数
野田市の環境政策に関心があるか	68.1	31.9	-	138
平成23年に策定された「野田市環境基本計画」を知っているか	18.5	81.5	-	146
「生物多様性」という言葉を聞いたことがあるか	46.9	53.1	-	145
平成27年3月に策定された「生物多様性の戦略」を知っているか	10.1	89.9	-	79
「野田自然共生ファーム」が設立されていることを知っているか	34.9	65.1	-	146
野田自然共生ファームが開催する「市民農園」に参加したことがあるか	1.4	61.2	37.4	147

数値は各回答の割合 (パーセント) を示す.

いた (表7). 東日本大震災に関連した原発事故の影響で野田市がホットスポットと言われたことも関係してか「放射性物質」という回答が約1割存在した.

野田市の環境政策等に関しては6つの質問をした (表8). 野田市の環境政策への関心は, 68.1%が「はい」と回答していたが, 実際の施策についての認知は, 例えば「野田市環境基本計画」の認知が18.5%と低い. 「生物多様性」についての認知は, 46.9%であり, 前述の内閣府の世論調査 (内閣府 2014) では, 「言葉の意味を知っている」と答えた者の割合が16.7%, 「意味は知らないが言葉は聞いたことがある」と答えた者の割合が29.7%, 「聞いたこともない」と答えた者の割合が52.4%であったので, ほぼ同程度といえる. 前述した「野田自然共生ファーム」の認知は約3割と決して高くはなく, 市民農園への参加は1.4%と少数である. 市民農園については「存在を知らない」という回答が37.4%であり, 野田市の環境政策と併せて野田自然共生ファームや市民農園の存在を普及していく必要がある.

1-2) 回答者と調査対象者の比較

ここでは, 回答者が母集団を代表しているのか, 回答者の属性を, そもそも想定していた野田市全域の住民構成と比較する. 方法としては, 2015年8月1日時点での住民基本台帳と2010年国勢調査を用い, 今回のアンケート回答者を年代別, 性別それぞれでの属性の構成が, 住民基本台帳・国勢調査からアンケート回答者を除くことで算出した非アンケート回答者におけるそれと変わらない, という帰無仮説を立ててカイ二乗検定を実施することにした.

年代では国勢調査の構成とは異なるという結果となった (表9). 特に20歳代, 30歳代, 70歳代において顕著な違いが見られた. 性別に関しては, 住民基本台帳の構成と同じとする帰無仮説は棄却されなかった (表10).

以上の結果から, 今回のアンケート回答者は, 年代で

表9. 回答者と調査対象者の年齢層の比較.

年齢層	回答者	非回答者	国勢調査
20歳代	7 (4.8)	17384 (14.5)	17391 (14.5)
30歳代	17 (11.7)	21846 (18.3)	21863 (18.3)
40歳代	27 (18.6)	18430 (15.4)	18457 (15.4)
50歳代	29 (20.0)	20694 (17.3)	20723 (17.3)
60歳代	35 (24.1)	26445 (22.1)	26480 (22.1)
70歳代	30 (20.7)	14765 (12.3)	14795 (12.4)
計	145 (100.0)	119564 (100.0)	119709 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

表10. 回答者と調査対象者の性別の比較.

性別	回答者	非回答者	住民基本台帳
男	77 (53.1)	78009 (50.2)	78086 (50.2)
女	68 (46.9)	77331 (49.8)	77399 (49.8)
計	145 (100.0)	155340 (100.0)	155485 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

表11. 設問『「コウノトリ」と聞いて何を最も強くイメージしますか』に対する回答.

選択肢	人数
赤ちゃんを運ぶ鳥	71 (49.0)
絶滅危惧種	36 (24.8)
自然環境	14 (9.7)
野生復帰/放鳥	11 (7.6)
兵庫県豊岡市	4 (2.8)
大きい	4 (2.8)
美しい/きれい	1 (0.7)
大空を飛ぶ	1 (0.7)
農業/米	1 (0.7)
害鳥	0 (0.0)
その他	2 (1.4)
回答者数	145 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

は一部代表性が認められないものとなった. 20歳代や30歳代の若年層の返信率が低いというアンケート調査そのものの課題ともいえる. 一般的にアンケート調査において, このような偏りが生じることはやむを得ない状況であり, 本研究でもこの偏りを前提として分析することとした.

2. 住民が捉える野生復帰に関する意識

アンケート結果から (1) コウノトリの保護・野生復帰の認識, (2) コウノトリの位置づけ, (3) 放鳥されるコウノトリの生息, (4) コウノトリ保護のための環境教育・啓発活動, (5) 野田市の課題の5項目に分けて整理していく.

2-1) コウノトリの保護・野生復帰の認識

まず, 「コウノトリ」のイメージであるが, 約半数が「赤ちゃんを運ぶ鳥」と回答した(表11). コウノトリの保護への認識は7つの質問をし, 表12に結果をまとめた. コウノトリという鳥の認知や絶滅のおそれのあることの認知は高かった. 実際にコウノトリを目撃したことのある人は少なかったが, 兵庫県豊岡市で見たことのあると記入した回答者もいた. 兵庫県豊岡市での野生復帰が実施されていることの認知は37.9%と必ずしも高い数字ではないが, 野田市で野生復帰が計画されていることに対しては74.0%であった. 一方で, コウノトリの飼育施設「こうのとりの里」については, 行ったことがある回答者は22.8%と低く, 「存在を知らない」が9.0%であり, 多くの回答者が飼育施設の存在を知らながらも行ったことがないことがわかる.

「こうのとりの里」でコウノトリを見た感想は, 21人が記入した. その記述から, 2人以上が書いていたキーワードを抽出し, 表13にまとめた. 「大きくて驚いた」といった, コウノトリの大きさについての感想が目立ち, 「大空を飛ぶところが見たい」といった内容もあった. また, 野生化できるのか心配する内容, 飼育施設に行くのが「道がわかりにくい」といった内容, 飼育にか

表12. コウノトリの保護への認識に関する質問への回答.

質問	はい	いいえ	存在を知らない	回答者数
コウノトリという鳥を知っているか	96.6	3.4	-	145
野生のコウノトリを見たことがあるか	11.0	89.0	-	145
コウノトリが絶滅のおそれがあることを知っているか	80.8	19.2	-	146
兵庫県豊岡市でコウノトリの野生復帰が行なわれていることを知っているか	37.9	62.1	-	145
今年の夏に野田市においてコウノトリの野生復帰が計画されていることを知っているか	74.0	26.0	-	146
野田市三ツ堀にある飼育施設「こうのとりの里」に行ったことがあるか	22.8	68.3	9.0	145

数値は各回答の割合（パーセント）を示す.

表13. 飼育下のコウノトリを見た感想 (自由記述, 上位5回答).

感想	人数
大きい	6
飛ぶのが見たい	3
野生化する心配	3
行くのが大変	2
経費が大変	2
回答者数	21

表14. 野生復帰に対する賛否.

選択肢	人数
おおいに賛成	50 (34.7)
どちらかといえば賛成	43 (29.9)
どちらともいえない	46 (31.9)
どちらかといえば反対	4 (2.8)
おおいに反対	1 (0.7)
回答者数	144 (100.0)

括弧内は割合 (パーセント) を示す.

表15. 野生復帰への賛否に関し「賛成」の理由 (複数回答を含む).

選択肢	人数
環境にとっていいことだから	44 (48.4)
コウノトリにとっていいことだから	38 (41.8)
もともと野生の鳥だから	36 (39.6)
野田市の活性化になるから	23 (25.3)
観光客が増えるから	7 (7.7)
農業にとっていいことだから	6 (6.6)
経済効果を生み出せるから	1 (1.1)
飼育されたコウノトリを見て, 肯定的な感想を持ったから	1 (1.1)
その他	7 (7.7)
回答者数	91 -

括弧内は割合 (パーセント) を示す.

かる経費を心配する内容があった.

次に, 野生復帰に関連した質問の結果を述べたい. まずは野生復帰の賛否であるが, 「おおいに賛成」が34.7%, 「どちらともいえない」が31.9%とほぼ同程度に多く選ばれていた (表14). 「どちらかといえば反対」「おおいに反対」は合計して3.5%と少数であった.

「賛成」(「おおいに」「どちらかといえば」を含む)・「どちらともいえない」・「反対」「おおいに」「どちらかといえば」を含む)の理由は以下の通りである (表15, 16, 17).

賛成の理由で最も選ばれていた回答は, 「環境にとっていいことだから」が48.4%と最も多く選ばれていたが,

「コウノトリにとっていいことだから」「もともと野生の鳥だから」にも約4割の回答があった (表15). 活性化への期待も25.3%あるが, 観光客・農業・経済効果といったものへの期待は少数であった. 「その他」では環境に関する記述が多く, 最も多く選ばれていた「環境にとっていいことだから」を含め, 野生復帰賛成の背景には環境への期待があることが伺える.

野生復帰に対して「どちらともいえない」と回答した理由である (表16). 最も多かったのは「自分の生活に関係があるのかわからないから」で41.3%の回答だった. 次に「野生復帰がうまくいくかわからないから」が続いた. 「その他」では, 「詳細を知らされていない」「そもそもなぜコウノトリなのかわからない」「遠くに飛んでいってしまう」といった野生復帰そのものに関する懸念が記述されていた.

野生復帰に対して反対の理由では, そもそも回答者数が少数であるが, 「資金の無駄だ/他の施策に資金をまわすべきだと思うから」に回答が集中した (表17). そ

表16. 野生復帰への賛否に関し「どちらともいえない」の理由 (複数回答を含む).

選択肢	人数
自分の生活に関係があるのかわからないから	19 (41.3)
野生復帰がうまくいくかわからないから	17 (37.0)
コウノトリに興味・関心がないから	13 (28.3)
賛成・反対の気持ちを両方感じているから	9 (19.6)
その他	5 (10.9)
回答者数	46 -

括弧内は割合 (パーセント) を示す.

表17. 野生復帰への賛否に関し「反対」の理由 (複数回答を含む).

選択肢	人数
資金の無駄だ/他の施策に資金をまわすべきだと思うから	4 (80.0)
自分に何のメリットもないから	1 (20.0)
農業に被害を与えるかもしれないと思うから	0 (0.0)
飼育されたコウノトリを見て, 否定的な感想を持ったから	0 (0.0)
コウノトリに気をつかわなければならないと思うから	0 (0.0)
野生復帰なんて無理/成功しないと思うから	0 (0.0)
コウノトリを目的に観光客などのよそ者が大勢来るから	0 (0.0)
その他	2 (40.0)
回答者数	5 -

括弧内は割合 (パーセント) を示す.

表18. 野生復帰に関しての心配の有無.

選択肢	人数
心配する	71 (49.7)
心配していない	38 (26.6)
何も思わない	34 (23.8)
回答者数	143 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

表19. 野生復帰による心配の内容（複数回答を含む）.

選択肢	人数
野生に帰すことが成功するかどうか心配	56 (78.9)
見物客がたくさん来て、ゴミのポイ捨てなど問題を起すのではないかな	10 (14.1)
周辺の開発ができないのではないかな	7 (9.9)
農業面での心配（農薬や除草剤を使えなくなる、苗が踏まれるなどの心配）	7 (9.9)
日常生活において、コウノトリに気をつかわなければならない	5 (7.0)
鳥インフルエンザ等が発生するのではないかな	3 (4.2)
その他	6 (8.5)
回答者数	71 -

括弧内は割合（パーセント）を示す.

表20. 野生復帰に期待する内容.

選択肢	人数
自然環境の復元	65 (73.9)
地域経済の振興	7 (8.0)
野田市としてのまとまり	6 (6.8)
農業の活性化	5 (5.7)
観光客の増加	4 (4.5)
その他	1 (1.1)
回答者数	88 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

表21. 「野生復帰に対する責任主体」と考えるものの回答.

選択肢	人数
野田市（行政）	47 (35.1)
誰も担わなくていい	28 (20.9)
野田市民全体	16 (11.9)
国（行政）	12 (9.0)
こうのとりり	10 (7.5)
国民全体	9 (6.7)
千葉県（行政）	4 (3.0)
周辺の住民	1 (0.7)
千葉県民全体	0 (0.0)
その他	7 (5.2)
回答者数	134 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

もそもアンケート票には「*野田市のコウノトリの野生復帰の資金には『みどりのふるさと基金』が活用されており、税金は使われておりません」と但し書きをしたのだが、それでも費用面に対する懸念が見られた。「その他」でも「税金が使われていないのは本当か」といった内容等が記述されていた。

野生復帰に関して心配の有無では、回答者の約5割が、心配があるとした（表18）。具体的な心配の内容は「野生に帰すことが成功するかどうか心配」に回答が集中し、約8割と最も多く選ばれていた（表19）。周辺の開発、農業面での心配、鳥インフルエンザなどの懸念は少数であった。「その他」でも、「もっと自然が多い地域で実施した方がよい」「野田市はカラスが多いため繁殖できない」といった内容が記述されていた。

野生復帰に関しての期待では、「期待する」と答えたのは回答者の61.5%であった（回答者数143人）。期待する内容について最も多かったのが「自然環境の復元」であり、約7割であった（表20）。野生復帰の賛成理由と同様に、環境への期待が強い。

次に、放鳥されたコウノトリに対する責任（保護・事故の場合などを総合して）を誰が最も担うべきかについて質問した結果であるが、最も多かったのは、「野田市（行政）」であり、次に多かったのが「誰も担わなくていい」が続いた（表21）。責任主体について選択した理由では、まず「野田市（行政）」については、「市が企画したのだから」といった記述、「誰も担わなくていい」に関しては、「放鳥したら、カラスやスズメと同じ自然の生き物」といった「放鳥したら野生の鳥」という記述であった。

野生復帰が成功するために回答者が何かする意思（参

表22. 野生復帰が成功するために行おうと思う内容（複数回答を含む）.

選択肢	人数
環境に配慮した生活を実践する（ごみ減量、省エネなど）	56 (69.1)
コウノトリを大事に思うようにする	27 (33.3)
コウノトリの生息地づくりに協力する（田んぼ・湿地・里山など）	17 (21.0)
農薬をできるだけ使わない／農薬をできるだけ使っていない作物を買う	14 (17.3)
コウノトリを活かした経済活動に協力する（関連商品の販売・購入など）	5 (6.2)
その他	1 (1.2)
回答者数	81 -

括弧内は割合（パーセント）を示す.

加姿勢)を質問した結果、何かする意思のある回答者は55.5%、意思のない回答者は44.5%であった(回答者数146人)。具体的な内容では、「環境に配慮した生活を実践する」が約7割と最も多く選ばれ、「コウノトリを大事に思うようにする」が33.3%と続いた(表22)。農薬の不使用や生息地づくりなど、コウノトリの生息に直接関係するような行動と比較すると少なかった。

2-2) コウノトリの位置づけ

「あなたにとって『コウノトリ』とは何ですか」の質問では、「豊かな自然環境の象徴やバロメータ」と「貴重な鳥」が最も多く選ばれた。ただ、「別に何も思わない」「他の生きものと一緒に」が続き、「野田市の活性化の起爆剤」「野田市の誇り/象徴/シンボル」といった回答は比較すると低い(表23)。

表23. 設問『あなたにとって「コウノトリ」とは何ですか』に対する回答。

選択肢	人数
豊かな環境の象徴やバロメータ	39 (27.7)
貴重な鳥	39 (27.7)
別に何も思わない	17 (12.1)
他の生きものと一緒に	15 (10.6)
野田市の活性化の起爆剤	12 (8.5)
野田市の誇り・象徴・シンボル	7 (5.0)
一度絶滅した鳥	6 (4.3)
農作物を販売するうえでの付加価値	1 (0.7)
経済効果を生み出すもの	1 (0.7)
世話のかかるもの・面倒なもの	1 (0.7)
苗を踏み倒す害鳥	0 (0.0)
その他	3 (2.1)
回答者数	141 (100.0)

括弧内は割合(パーセント)を示す。

「野田を象徴するもの」と「『野田の自然』のイメージ」については、自由記述で1つ記入してもらう形式をとった。結果は、表24および表25に整理した。「野田を象徴するもの」では、「醤油」という回答が55.3%で最も多く、「キッコーマン」と合計すると約7割となる(表24)。「『野田の自然』のイメージ」は、「清水公園」が41.7%と最も多くなり、次に、江戸川や利根川と合計すると「川・河川」に関連したものとなる(表25)。どちらもコウノトリについての記述はあるが少数となっている。

放鳥されたコウノトリが死亡してしまうかもしれないことに関しては、「野生の生き物なので仕方がない」が63.3%と最も多く選ばれていた(表26)。次に「自然環境の整備が必要と感じる」33.8%、「かわいそう/悲しい」

表24. 設問『「野田を象徴するもの」と聞いて何を最も強くイメージしますか』に対する回答(自由記述)。

回答	人数
醤油	78 (55.3)
キッコーマン	29 (20.6)
枝豆	13 (9.2)
清水公園	3 (2.1)
コウノトリ	3 (2.1)
関宿城	2 (1.4)
桜	2 (1.4)
川	2 (1.4)
東武野田線	2 (1.4)
その他	7 (5.0)
回答者数	141 (100.0)

括弧内は割合(パーセント)を示す。

表25. 設問『「野田の自然」と聞いてどのような場所を最も強くイメージしますか』に対する回答(自由記述)。

回答	人数
清水公園	58 (41.7)
川・河川	12 (8.6)
江戸川	5 (3.6)
江戸川・利根川	4 (2.9)
利根川	3 (2.2)
江戸川と利根川に挟まれた所	3 (2.2)
利根運河	2 (1.4)
田畑	16 (11.5)
森林・緑	12 (8.6)
里山	6 (4.3)
コウノトリ	5 (3.6)
公園	2 (1.4)
ゴルフ場	2 (1.4)
その他	9 (6.5)
回答者数	139 (100.0)

括弧内は割合(パーセント)を示す。

表26. 放鳥されたコウノトリが死亡してしまう可能性があることについての回答(複数回答を含む)。

選択肢	人数
野生の生き物なので仕方がない	88 (63.3)
自然環境の整備が必要と感じる	47 (33.8)
かわいそう/悲しい	30 (21.6)
今まで費やした資金の無駄だと思う	16 (11.5)
これ以上野生復帰をする必要がないと思う	12 (8.6)
行政に責任を感じる	11 (7.9)
天敵となる動物を駆除すべきだと思う	8 (5.8)
そもそも野生復帰をしなければよかった	5 (3.6)
関心・興味がない	6 (4.3)
その他	4 (2.9)
回答者数	139 -

括弧内は割合(パーセント)を示す。

表27. 放鳥されたコウノトリの野田での生息希望の有無.

選択肢	人数
生息してほしい	92 (64.3)
生息してもらいたくない	4 (2.8)
どちらでもいい	42 (29.4)
関心がない	5 (3.5)
回答者数	143 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

表28. 放鳥されたコウノトリが野田で「生息してほしい」と回答した理由.

選択肢	人数
自然環境が豊かであることを示すから	54 (58.7)
野田市の誇り・象徴・シンボルとなるから	16 (17.4)
コウノトリが見たいから	11 (12.0)
野田市の活性化につながるから	6 (6.5)
コウノトリを飼育していたから	3 (3.3)
経済効果を生み出すから	0 (0.0)
その他	2 (2.2)
回答者数	92 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

表29. 放鳥されたコウノトリが農業に被害を与えると思うか.

選択肢	人数
はい	16 (11.0)
いいえ	33 (22.8)
わからない	96 (66.2)
回答者数	145 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

21.6%と続いた。回答者の多くが放鳥されたコウノトリを野生の生き物として、その死を捉えていることがわかる。また、その死亡の原因として考えられている、自然環境の整備を必要としていることも伺える。

2-3) 放鳥されるコウノトリの生息

放鳥されるコウノトリの生息に関して回答者がどのように考えているのか、生息希望やかつて害鳥であったことをふまえ、農業被害について質問した結果を述べていく。

まず、野田での生息を希望するかについては、回答者の約6割が「生息してほしい」と答えた、「生息してもらいたくない」や「関心がない」は少数であった（表27）。生息希望の理由では「自然環境が豊かであることを示すから」が最も多く選ばれ、集中していた（表28）。

コウノトリは水田が重要な採餌場所となっているた

め、かつて田植え後の苗を踏み倒すとして農家から害鳥視されていた。したがって、将来的にコウノトリの生息数が増加した際に問題視されるような危惧もある。そこで農業被害について質問した結果を取り上げる。まず、農業に被害を与えると思うかどうか質問した結果は「わからない」が66.2%と最も多く、「はい」は11.0%となった（表29）。したがって現時点では、農業被害についてわからないと捉えられていることが伺える。被害が深刻な場合の方法としては、「被害がまだ発生していないので現段階で議論する必要がない」が半数以上選ばれていた（表30）。多くの回答者が農業被害について、判断できないと考え、現段階で議論する必要がないと考えていることがわかる。

2-4) コウノトリ保護のための環境教育・啓発活動

コウノトリの主要な生息環境は水田であり、それは人間の生活空間と重なる。前述のように、かつてコウノトリは水田に入り苗を踏み倒すということで害鳥視されていたこともあり、今後も放鳥を実施するのであれば住民

表30. 放鳥されたコウノトリが深刻な被害をもたらした場合の対処方法.

選択肢	人数
被害がまだ発生していないので、現段階で議論する必要はないと思う	62 (55.9)
被害を受けた農家への金銭的補償	23 (20.7)
捕獲、場合によっては駆除	7 (6.3)
関心・興味がない	7 (6.3)
何もするべきではない	6 (5.4)
その他	6 (5.4)
回答者数	111 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

表31. コウノトリの保護に向けた環境教育や啓発活動の対象.

選択肢	1番目	2番目
	人数	人数
野田市全域の住民	53 (37.1)	25 (21.0)
国民全体	40 (28.0)	23 (19.3)
生息地周辺の住民	21 (14.7)	11 (9.2)
野田市全域の子ども	16 (11.2)	33 (27.7)
行政職員	9 (6.3)	8 (6.7)
野田市内の農業従事者	3 (2.1)	14 (11.8)
観光客	0 (0.0)	5 (4.2)
観光業者	0 (0.0)	0 (0.0)
その他	1 (0.7)	0 (0.0)
回答者数	143 (100.0)	119 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す.

の理解と協力を進めていく必要がある。また、「なぜ野田でコウノトリなのか」という意見も少数であったが存在する。これらのことをふまえると、環境教育や啓発活動によって、コウノトリやその保護についての意義を十分に認知させていくことが重要と判断される。そこで、今回のアンケートでは、コウノトリの保護活動に関する環境教育や啓発活動について質問した。

環境教育や啓発活動の対象として、重要だと考える1番目および2番目の対象をそれぞれ回答してもらった。この形式は、環境教育や啓発活動の対象が1つに限定されるものではないためであり、上位2つを把握する試みをしたものである。1番目として、最も多かったのが、「野田市全域の住民」の37.1%となった(表31)。次が「国民全体」「生息地周辺の住民」「野田市全域の子ども」が続いた。2番目については、「野田市全域の子ども」が最も多く選ばれ、「野田市全域の住民」、「国民全体」が続いた。1番目、2番目ともに、上位の選択肢は共通していたが、2番目については「野田市全域の子ども」が1番目に比べて選ばれていた。また「野田市内の農業従事者」「観光客」も同様である。また、2番目の回答者数が1番目に比較すると少なく、回答も分散していた。1番目の回答で「野田市全域の住民」が多くなったこともあり、2番目の回答がしにくかったかもしれない。

環境教育や啓発活動の内容については、「コウノトリを含む野田の自然環境」について、最も多く選ばれ、「コウノトリの生態・特徴」が続き、主に自然環境について情報を求めているといえる(表32)。

環境教育や啓発活動の推進方法として、「学校の授業の中での学習・体験活動」が最も多く選ばれ、「紙媒体の広報誌を通じた定期的な情報の発信」、「インターネットのサイトを通じた定期的な情報の発信」、「ポスターやチラシ、ステッカーなどを活用した広報活動」、「コウノトリに関するイベント・講習会・研修会の実施」が続き、回答が分散していた(表33)。このことから、野田市民はコウノトリをめぐる環境教育や啓発活動について、さまざまな内容のものをバランスよく企画し実施することを期待しているということが読み取れる。

コウノトリ保護のために環境教育や啓発活動が必要かどうかについては、「はい」が60.4%であった(表34)。しかし、「わからない」という回答が35.4%存在しており、一部の住民に対して環境教育や意識啓発の重要性が十分認知されていないということも伺える。そして、実際に野田市でコウノトリ保護のために環境教育や啓発活

表32. コウノトリの保護に向けた環境教育や啓発活動の内容。

選択肢	人数
コウノトリを含む野田の自然環境	41 (29.1)
コウノトリの生態・特徴	29 (20.6)
今後のコウノトリの野生復帰計画の展望	19 (13.5)
コウノトリが生息している場所の情報	12 (8.5)
野田市によるコウノトリの保護政策	9 (6.4)
コウノトリの飼育数および野生下での生息数	8 (5.7)
コウノトリを活用した地域活性化の取り組み	8 (5.7)
コウノトリの天敵やコウノトリの生息を脅かす外来種	6 (4.3)
コウノトリと他の鳥との違いや見分け方	2 (1.4)
水田やビオトープに生息する生きもの	2 (1.4)
市民団体によるコウノトリの保護活動	2 (1.4)
その他	3 (2.1)
回答者数	141 (100.0)

括弧内は割合(パーセント)を示す。

表33. コウノトリの保護に向けた環境教育や啓発活動の方法。

選択肢	人数
学校の授業の中での学習・体験活動	38 (27.5)
紙媒体の広報誌を通じた定期的な情報の発信	25 (18.1)
インターネットのサイトを通じた定期的な情報の発信	20 (14.5)
ポスターやチラシ、ステッカーなどを活用した広報活動	19 (13.8)
コウノトリに関するイベント・研修会・講習会の実施	18 (13.0)
生息地整備などのボランティア活動	10 (7.2)
コウノトリの見学や観察	6 (4.3)
その他	2 (1.4)
回答者数	138 (100.0)

括弧内は割合(パーセント)を示す。

表34. コウノトリの保護のために環境教育や啓発活動が必要かどうか。

選択肢	人数
はい	87 (60.4)
いいえ	6 (4.2)
わからない	51 (35.4)
回答者数	144 (100.0)

括弧内は割合(パーセント)を示す。

動が行われていると思うかという質問には、「あまり行われていないと思う」が最も多く選ばれ、「少し行われていると思う」が続いた(表35)。この質問についても「わからない」が約2割存在している。

表35. コウノトリの保護のために環境教育や啓発活動が野田市で行われていると思うか。

選択肢	人数
十分に行われていると思う	14 (9.8)
少し行われていると思う	42 (29.4)
あまり行われていないと思う	55 (38.5)
まったく行われていないと思う	4 (2.8)
わからない	28 (19.6)
回答者数	143 (100.0)

括弧内は割合（パーセント）を示す。

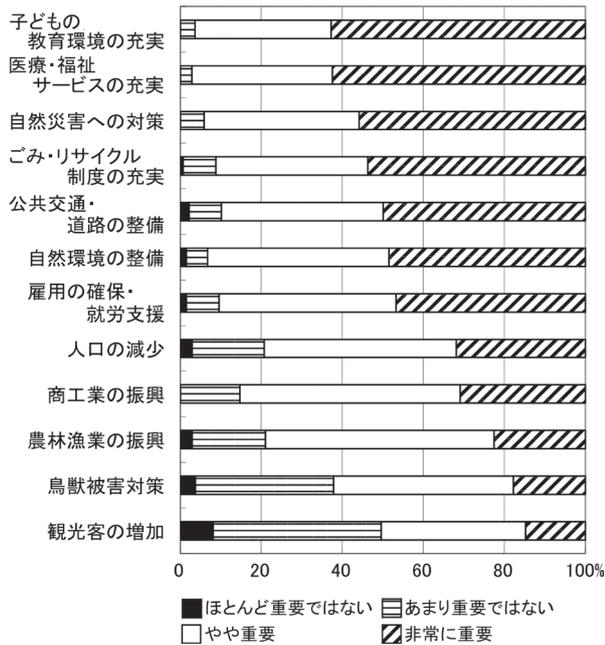


図1. 野田市における課題としての重要性の程度。

以上から、コウノトリ保護のための環境教育や啓発活動を考えていくうえでは、野田市全域の住民を対象に広く実施していくことが必要と捉えられているといえる。しかし環境教育や啓発活動の重要性が十分伝わっていないこと、学校教育と学校外での教育を連携させる必要性があることなどといった課題も浮き上がってくるが、いざれにしてもコウノトリの生息や自然環境、野生復帰計画の展望について、野田市民は情報を求めており、それらに関する環境教育や啓発活動を求めているということが理解できる。

2-5) 野田市の課題

野田市の課題として12項目を挙げ、それぞれの項目についてどの程度重要と考えるかについて質問した。これは、実際に人々が居住している野田市に対して、全般的かつ多面的にどのようなニーズがあるかを考えているかを把握することを目的に行った質問である。その結果、上位となったものは、「子どもの教育環境の充実」

「医療・福祉サービスの充実」「自然災害への対策」であり、下位となったのは「観光客の増加」「鳥獣被害対策」「農林漁業の振興」であった(図1)。

各項目の平均値と標準偏差(質問において「非常に重要」に4,「やや重要」に3,「あまり重要ではない」に2,「ほとんど重要ではない」に1を併記していた)を表36に整理した。平均値は3.60から2.57の幅となった。特に「観光客の増加」,「鳥獣被害対策」,「人口の減少」においては、回答者によって重要度の認識にばらつきがあることが伺える。

また、住民に把持されている「野田市の環境課題」については以下のとおりである。アンケート票では、「野田市には、どのような環境の課題があると思いますか」と自由記述での質問をした。キーワードを集計し、表37の結果となった。最も多く記述されていたのは「ごみ」に関するものであり、ポイ捨てや不法投棄、リサイクルなどの視点であった。「16号」「関宿」など具体的な場所を記述する回答も見られた。次に多かったのが、「自然」に関するもので、多くが自然の開発を悲しむもので

表36. 野田市における課題としての重要性の程度。

項目	値
医療・福祉サービスの充実	3.60±0.55
子どもの教育環境の充実	3.59±0.56
自然災害への対策	3.50±0.61
ごみ・リサイクル制度の充実	3.44±0.68
自然環境の整備	3.40±0.66
公共交通・道路の整備	3.38±0.73
雇用の確保・就労支援	3.36±0.70
商工業の振興	3.16±0.66
人口の減少	3.08±0.78
農林漁業の振興	2.98±0.73
鳥獣被害対策	2.76±0.78
観光客の増加	2.57±0.84

値は平均±標準偏差を示す。

表37. 野田市における環境課題(自由記述, 複数回答を含む)。

回答	人数
ごみ・ポイ捨て・不法投棄・リサイクル	36 (35.0)
自然の開発・自然の保護・森林減少	29 (28.2)
鳥獣被害(カラス含む)	10 (9.7)
交通(道路・電車)整備	5 (4.9)
放射性物質・ホットスポット	4 (3.9)
自動車による大気汚染・騒音	3 (2.9)
地球温暖化	2 (1.9)
空き家・過疎化	2 (1.9)
その他	9 (8.7)
回答者数	103 -

括弧内は割合(パーセント)を示す。

あり、「自然を残してほしい」といった記述があった。他には、カラス被害、放射性物質についての情報公開を求める記述が見られた。1つのみの回答を「その他」として集計したが、そこには、「下水」「農薬汚染」「公務員の環境問題意識」といった記述があった。

考 察

以上の集計の結果から、放鳥直前の段階における野田市の住民は、コウノトリおよびコウノトリの野生復帰に対し、一般的に肯定的かつ好意的な捉え方をしている、ということが明らかとなった。国内でのコウノトリの野生復帰が実施されたのは野田市が2例目であり、多くの回答者に肯定的かつ好意的に捉えられたということは、今後日本各地でのコウノトリの野生復帰実施を推進できる材料となり得るものといえる。

コウノトリの野生復帰に対して肯定的かつ好意的な意識が持たれていること背景には、すでにコウノトリが「自然環境のシンボル」として市民に認識されていることが挙げられる。つまり野生復帰事業に伴って、野田市の「自然環境がよくなる」という期待がもたれているということが伺える。

一方で環境教育や環境意識の啓発をめぐることは、さまざまな課題が存在することの示唆が得られた。特にコウノトリ保護のための野田市における環境教育や啓発活動については、依然として十分ではないと意識している住民が多いことが示されている。つまり野生復帰の成否の重要なアクターである住民からの協力を得るための環境教育の在り方について、その対象者や内容を含めた検討が必要である、ということが明らかになった。行政が中心となって計画し実施する野生復帰事業には、当然地域住民の協力が不可欠となる。地域住民からの支持と協力を得るためにも、地域住民への何らかの環境教育や意識啓発が必要となるが、市民の側が環境教育や意識啓発の内容や対象者、そのあり方についてどのように受け止めてどのようなものを期待をしているのかが、今回のアンケート調査によって明らかになった。このことから、環境教育の実施主体のニーズを汲んだ環境教育を遂行するばかりではなく、環境教育の受け手であり、野生復帰を支える市民からのフィードバックが確立している環境教育を企図していくことが必要である。そしてそれを具体的に担保するのは、地域における環境教育計画を策定することであり、その策定に地域住民、もしくはその代表者が参加するルートを確保することも重要であろう。

ところで野田市の「地域のシンボル」としてコウノトリを捉えようとする意識がほとんど見られなかったことは、注目すべき点である。このことは、これまでの調査研究(本田 2006)(本田・菊地 2011)とは明確に異なるものである。つまり野田市ではコウノトリを「地域のシンボル」として位置付けるのではなく、広く「自然環境のシンボル」と捉えていることに特色が現れていると考えられる。野田市は枝豆が全国有数の出荷量であるなど、農業も盛んな自治体であると同時に、首都圏のベッドタウンであり宅地面積も広いため、都市化が進む首都圏郊外の都市住民としての意識が有されていることが推察される。そのような自治体である野田市の住民が、今回のコウノトリの野生復帰の実施を契機に、地域活性化に向けた意識の在り方をどのように変化・発展させていくかについては、今後も継続して注視していくことが必要となろう。

そもそも野生生物の復帰事業であるならば、野生復帰後の当該野生動物の生息域に関しては人間の期待どおりには当然ならない。特にコウノトリのような「鳥」であれば、放鳥後は国内のみならず国外へも移動していく可能性もある。野田市におけるアンケート調査では、放鳥されたコウノトリには野田市で生息してほしい、という希望を持っていた回答者は約3分の2にものぼったが、現実的には、2015年7月に3羽放鳥されたコウノトリはそのすべてが野田市には定着しておらず、1羽は2015年12月に死亡し、2羽は他県に移動してしまっている(2016年2月時点)。

このことから、コウノトリの野生復帰事業を担った野田市役所が放鳥したコウノトリが他の自治体に移動してしまうことについてどのように評価するか、また放鳥したコウノトリが野田市に定着していない期間が一定程度続いた段階で、野田市の市民感情がどのように推移するかについて追跡調査をしていくことは、今後の課題として重要と思われる。

コウノトリの放鳥の国内最初の例は2005年に兵庫県豊岡市で行われたものであるが、これは西日本の農村地帯で実施されたものである。今回の事例の野田市は、確かに水田が広がっている農村地帯であるという一面があるものの、その一方で東京のベッドタウンともいえるほど都市化が進展している地域でもある。つまり野田市の住民意識は、豊岡市に比べて都市の住民であるという意識が強いことが推察される。都市住民の意識傾向が強いことで、環境保全や野生生物の保護、開発や教育に対して、豊岡市のような意識とは異なるものが把持されてい

る可能性がある。よって野田市の事例を、都市型野生復帰に際しての先行的事例として捉え、今後同様の事業展開を企図していく上でこれに注視していくことは、環境行政および環境教育計画を展開する上で有効であると思われる。

謝 辞

アンケート調査に返信いただいた千葉県野田市の皆様にはお忙しいところ回答いただき、ありがとうございます。なお本研究は、科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「環境課題が庸俗なアジアの自治体におけるコミュニティ支援型環境教育の研究」(研究課題番号26350244)を受けて実施したアンケート調査のデータを利用した。

摘 要

千葉県野田市でコウノトリの放鳥が行われる直前の段階で、野生復帰およびその事業に関する住民の意識調査を2015年6月から7月にかけて実施した。無作為に抽出した住民500名を対象としたアンケート調査を郵送回収法により実施したところ、回収率は約30%となった。分析の結果、コウノトリの野生復帰事業が野田市で行われていることについて、約65%の回答者が肯定的な意見を持っていた。また回答者の約3分の1がコウノトリは豊かな自然環境のシンボルおよびバロメータであり、また同じく約3分の1がコウノトリは貴重な鳥である、と認識していることが明らかになった。そしてコウノトリおよびその野生復帰をめぐる環境教育については、多くの住民がその対象者は野田市の住民すべて、もしくは野田市の子ども、としていること、そして約60%の住民が環境教育・意識啓発活動はコウノトリ保護のためには重要である、と認識していることが明らかとなった。

キーワード 環境教育, 野田市, コウノトリ, 野生復帰, アンケート調査

引用文献

- Anonymous (2011) 多様な生物との共生をめざし、貴重な谷津田と利根運河の再生を図る (クローズアップ自治体経営改革 第11回 千葉県野田市). アカデミア, 96:24-28.
- 本田裕子 (2006) 放鳥直後における住民の視点からのコウノトリ放鳥の意義 - 新豊岡市全域のアンケート調査から. 東京大学農学部演習林研究, 116:113-143.
- 本田裕子 (2009) 放鳥直前期におけるコウノトリ放鳥への住民意識 - 野田市全域のアンケート調査から. 東京大学農学部演習林研究, 121:149-172.
- 本田裕子 (2015) 放鳥6年経過後のトキの野生復帰事業に関する住民意識について - 佐渡市全域のアンケート調査から -. 大正大学研究紀要, 100:259-290.
- 本田裕子・林 宇一 (2009) 放鳥直後期におけるコウノトリ放鳥への住民意識 - 野田市全域のアンケート調査から -. 山階鳥類学雑誌, 121:74-100.
- 本田裕子・林 宇一・玖須博一・前田 剛・佐々木真二郎 (2010) ツシマヤマネコ保護に対する住民意識 - 対馬市全域住民を対象にしたアンケート調査より. 東京大学農学部演習林研究, 122:41-64.
- 本田裕子・菊地直樹 (2011) コウノトリの野生復帰に関する住民アンケート (2011年1月) 結果報告. 野生復帰, 1:93-107.
- 本田裕子・高橋正弘 (2015) ツシマヤマネコとその保護活動をめぐる住民の認識に関する研究 - 対馬市民へのアンケート調査から -. 地域政策 (高崎経済大学地域政策学会発行), 18(1):79-98.
- IUCN (1995) Guidelines for Re-introduction. Prepared by the IUCN/SSC Re-introduction Specialist Group. IUCN, Gland, Switzerland and Cambridge, UK.
- 内閣府 (2014) 環境問題に関する世論調査 (2014年9月公表). [<http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-kankyou/>]
- 内藤和明・菊地直樹・池田 啓 (2011) コウノトリの再導入 - IUCNガイドラインに基づく放鳥の準備と環境修復 -. 保全生態学研究, 16:181-193.
- 大沼あゆみ・山本昌資 (2009) 兵庫県豊岡市におけるコウノトリ野生復帰をめぐる経済分析 - コウノトリ育む農法の経済的背景とコウノトリ野生復帰がもたらす地域経済への効果. 三田学会雑誌, 102(2):191-211.
- 新保國弘 (2013) コウノトリの舞うまでに - ガン・ツル・コウノトリに見る野田の自然史. 崙書房出版, 千葉, 202 p.

(2016年2月5日受理)

